

悪霊 第三部・五月の紅い空

悪
霊

第
三
部
・
五
月
の
紅
い
空

【登場人物】

- 伊集院満枝……………H市の地主の娘
猪俣佐和子……………満枝の元クラスメイト。東京で左翼活動に従事
安西小百合……………伊集院満枝の一年後輩
佳代……………貧しい農家の娘
喜代美……………女工
小沼健吾……………労働運動家。伊集院家の元小作人
篠原ヨシ……………伊集院家の使用人
村野栄太郎……………党员。マルクス主義研究者
堀田弁護士……………満枝の法定後見人
川奈昭一郎……………満枝の元婚約者・昭三の父。川奈産業社長
白瀬朱鷺……………女相場師。料亭「扇屋」の女将
鎌田悟……………党员。東京支部第四地区長
増田喬……………小百合の兄の後輩

昭和五年（一九三〇）年三月～五月。東京市、北海道H市

V

あと数日で四月は終わる。

すなわち、五月一日のメーデーが近づいていた。

夕刻、淡路町の「アジト」で、小沼健吾は一いっせうら張羅の背広に袖を通していた。そのかたわらに立っていた佳代が、小沼の掌にネクタイを乗せる。

「かなり遅くなると思うから、先に寝てなさい」

佳代は小さく頷いた。ネクタイを締め終え、玄関に向かう。

「あ」

小さな叫びとともに、佳代の手が小沼の肩に伸びた。久しぶりに引っ張り出した背広に付着していた糸くずを、丁寧いんていに払った。

佳代の掌が、そっと肩に触れる度に息が詰まった。心臓の鼓動が早まり、額に汗が出てくる。

馬鹿な……。

小沼は、送らなくていいよ、と肩越しに声をかけ、玄関で靴を履きながら、口の中で自分を責めた。

大事の前だというのに、何を考えているんだ……。

小作争議の決行の前夜など、妙に気が高ぶり性欲が昂進することがあるのは、経験で知っていた。ただ、その対象が、佳代に向けられていることに、強い自責の念が沸き上がる。

一年前、北海道で出会った時の佳代は、貧しい家で育った娘らしく、手足は小枝のように痩せ、幼児のようなからだつきだった。

この淡路町のアジトに住むようになってから、佳代のからだは急におとなびてきた。手の甲は丸みを帯び、頬から喉、襟足にかけて匂うような艶を帯びてきている。

そういえば……。小沼は思った。

メーデーで予定されている「行動」が終わった後、無事この家に帰ってこれるかどうかわからない。佳代のはじめに身の振り方を考えてやったほうがいいのではないのか。

誰に頼る？ 「党」は当てにならない。ふと、伊集院満枝の白い顔が脳裡に浮かんだが、すぐに打ち消した。

知り合いの蕎麦屋にでも勤めさせるか……。そんなことを考えつつ、小沼は「会合」の場所へと向かった。「会合」と言っても、幹部に会い、「党」の指令を一方的に受け取るだけである。

場所は銀座のカフェであった。世間は不況の風に覆われていたが、盛り場は相変わらずの賑わいである。指定されたカフェに入り、女給にある名前を告げる。「党」の東京支部の幹部が偽名で個室を取って待っているはずであった。

部屋に入ると、アルコールの匂いと煙草の煙が充満していた。白いクロスを敷いた長方形のテーブルに、三人が座っていた。ビールのグラスや高額そうな料理の皿が所狭しと並んでいる。

「掛けたまえ」

声をかけてきたのは、鎌田悟だった。すでに顔が赤い。その隣には見知らぬ男。その向かいには、小沼に背を向けて洋装の女性が座っている。

「君も呑むだろう。ビールでいいかね？」

「……ええ」

小沼は言葉を濁しながら、洋装の女性の隣に座った。

出陣前の酒宴のつもりだろうか。どうせ小沼に拒否権はないのだから、街頭連絡で充分のはずだ。こんなことで、貴重な「党」の資金を無駄遣いするなんて……。

椅子に腰をかけ、何気なく隣に座る女性を見やって、小沼は息を呑んだ。

猪俣佐和子だった。

つい最近、小沼に「組合」入りを拒絶された佐和子が、「党」の幹部たちと並んで席に着いている。すでにビールを呑んでいるらしく、頬がほんのりと赤い。俯き加減にテーブルに視線を落とす、小沼に顔を向けようとしてもしない。

「彼女は」

鎌田が説明し始めた。

「東京支部長補佐として、今回の件を手伝ってくれたことになった井上君だ」

井上というのが、「党」が佐和子に与えた変名なのだろう。どのような手段を使って入党したかは知らぬが、いきなり東京支部長補佐とは……。しかし、それならば、東京支部第四地区長の鎌田より上席に座っているはずだが。

訝しがる小沼の心中を察してか、鎌田は眼鏡の位置を直しながら言った。

「四日前に、組織の改編があった。ほくが東京支部長として、今回の『行動』の指揮を執る」

東京支部長は検挙されたのだな……。小沼は思った。こうして「党」から優秀な人材が減っていき、たいした活動歴もない青二才がますますのさばることになる。

少なくとも、前の東京支部長ならば、「会合」と称して、銀座の一流カフェで飲み食いし、貴重な党の資金を散財することはなかったはずだ。

鎌田は、隣に座る陰気な男に目配せした。男は、足許のかばんから新聞紙に包んだものを取り出し、小沼の目の前に置いた。

「それを持ってたまえ」

鎌田に促され、小沼は包みを手に取った。ずしりと重く、硬い手触りから、拳銃であることは明らかだった。

「護身用だ。君の受け持ちは、今回の『行動』の要となる。よろしく頼むよ」

こんな拳銃一丁を渡されても、成功の可能性が高まるわけではない。第一、これを使うことがあるとすれば、「行動」が失敗に終わった時だ。そんなことより、行動隊員に支給されるはずの武器の手配はどうなっているのだ……。

ふと、傍らに座る佐和子の眼差しを感じた。そっと見やると、佐和子はわずかに眼を伏せ、目の前に並べられた皿を見つめるばかりだった。

「集合場所は確保したかね」

そう問われ、小沼は頷いた。

再び、佐和子の眼差しが、左の肩のあたりに感じられた。こころなしか、乱れた息づかいすら伝わってくる。

「実はその件なんだが……」

苦勞して確保した場所を聞いてから、鎌田は言った。

「計画が変わった。君の受け持ちは、新橋だ」

小沼の顔色が変わった。決行まであと数日。今からどうやって新たな待機場所を確保せよというのか。思わず、佐和子の顔を見た。面差しを堅くしたまま俯いている。

鎌田は、目をそらしながら言った。

「場所は、われわれが確保しつつある。決まり次第、すぐに伝える。君は当日、行動隊員をその場所に集めてくれればいい」

「なぜ……」

小沼は、怒りを抑えて声を振り絞った。

「今になって、そんな……」

「情勢の変化だ」

鎌田はびしゃりと言いつつ放った。これ以上の質問は受け付けないという意味表示だった。

「ただ、集合場所が変わったただけだ。たいしたことじゃない」

なにを馬鹿な……。小沼は拳を握りしめた。様々な工場から寄せ集めた百人にのぼる「行動隊員」に、集合場所の変更を伝えるだけでも一苦勞だ。また、少しでも「行動」を成功に近づけるため、小沼は京橋近辺の土地勘を身につけようと、任務の合間を縫ってあたりを探っていた。いざという時の逃走経路も捜し、各隊員には伝えてある。それと同じ事を今から当日までに繰り返すのは、不可能なのだ。

「まあ、呑めよ」

鎌田はビール瓶を差し出し、小沼のグラスに注いだ。

「ご苦労だったね。好きなだけ食べていきたまえ」

冗談ではない……。今からでも動き出さないと、間に合わない。

「いえ……」

小沼はぶつきらぼうに立ち上がり、一礼した。

「街頭連絡がありますので、これで……」

嘘ではなかった。

銀座での「会合」を終えた後、小沼は幾人かの「行動隊員」や「細胞」と街頭で会う手はずになっていた。

カフェを出て、まず向かったのは、銀座の大通りに面して建っている六階建ての服部時計店だった。屋上に聳える巨大な時計台は、銀座のシンボルであり、待ち合わせにもよく使われる。

「あ！」

やってきた小沼を、笑顔で出迎えたのは、貴代美だった。カフェの女給をしていた頃にあつらえた洋装である。小沼は笑顔を返し、連れだつて歩き始めた。歩きながら、話をかわした。

「結局、何人だ？」

「確かなのは二十人。もう少し増えそうだけど……」

小沼の腕にすがり、笑みを保ったまま、しかし声音は低くひそめて貴代美は答えた。

貴代美が「組合員」として正式にオルグ（勧誘活動）を始めてから、百人近い女工が「組合」に加入した。さらに、職場での人望の厚い男性の職工も、貴代美の勧誘で数多く「組合」に入ってきた。「組合」内部での貴代美の声望はあがつていく一方だった。

その貴代美が、女工たちとともに、メーデーでの「行動」に参加したい、と言い出したのは、三週間ばかり前だった。

小沼は、女工たちに後方支援を頼むつもりだった。しかし貴代美たちは、あえて前線に出たい、という。女には危険すぎる、と翻意させようとしたが、貴代美は譲らなかつた。

大丈夫だよ、女だからって、あたい、生まれてこの方、喧嘩じゃ男にも負けたことないんだ。

仲間には、金玉の蹴り方、ちゃんと教えとくからサ。

苦笑する小沼に、貴代美はさらに言い募ったものだった。

小沼さん、前にフランスの絵を見せてくれたじゃないか。

「勉強会」の時、貴代美たち女工に、ドラクロワの『一八三〇年七月二十八日』と題された絵を見せたことがあった。一八三〇年、国王に対して民衆が反乱を起こした、いわゆる七月革命を題材としている。肩や胸をあらわにした女神が、赤白青の三色旗を大きく掲げ、その後を武装した民衆が続く。

あの絵、感激しちゃった。あたい、どうしても、仲間と一緒に戦いたい。先頭に立って、悪い連中を蹴散らしてやりたいんだ。

小沼が承諾したのは、その絵に描かれた女神を、貴代美と入れ替えても違和感がないように思ったからだだった。

今夜は、その貴代美に決行場所の変更を知らせねばならない。

「実はな……」

重い口調で、「党」の命令を伝えると、貴代美はあっさりと頷いた。

「わかった。どこだっていいよ、あたいたちは」

「いいのか……?」

急な変更に動揺する者がいても不思議はないのだ。そう言うと、貴代美は微笑んだ。

「あたいは、尻込みなんかしないよ。小沼さんのためだもん」

貴代美の澄んだ眼差しに、小沼は、胸が熱くなった。

「あたいは、馬鹿だから、難しいことはわかんない。でも、小沼さんは信じられる。小沼さんの言うとおりにすれば、世の中、よくなると思う。だから、迷ったりしないよ。安心して」

「なあ……」

小沼は歩みを止めた。

「なあに?」

「お前、今回の行動が終わったら、モスクワに行かないか?」

「モスクワ?」

二カ月後にモスクワで、各国から派遣された労働者による会議が開かれる。「党」としては、これを機会に、十数人の「党员」や「組合員」で代表団を組織して秘密裏に派遣し、当局の弾圧による混乱で途絶えていたソ連との関係を復活させたいと考えている。

代表団のメンバーは、会議が終わった後もモスクワに留まり、地元の教育機関で活動家として

の訓練を受けることになっていた。小沼にも、そのメンバーとするにふさわしい労働者を推薦してほしいと要請が来ていた。

小沼は、貴代美を推薦しているのだ。

「あたいななか、ダメだよ」

貴代美は、心底困ったような顔になった。

「難しいことわかんないし、外国なんておっかないし……」

「大丈夫、お前ならできるさ」

「そうかなア……?」

自信なさげに俯く貴代美に、小沼は微笑んだ。

必要なのは、お前のような人材なんだ。頭でっかちのインテリや、怖いもの知らずのお嬢さんではなく……。

貴代美と別れた後、数度の街頭連絡をこなし、小沼は帰路に着いた。

貴代美以外の「行動隊員」は、突然の計画変更に動揺を隠し切れないようだった。無理もないが……。重い足取りで、暗い夜道を歩きつつ「隠れ家」へと向かっていた小沼の背後から、「あの」と呼び止める声があった。

「お久しぶりです」

振り向くと、深々と頭を下げたのは、猪俣佐和子だった。

驚きの余り、声もなかった。常に最悪の事態を想定して行動するのが、非合法活動に携わる者

が心得ておくべき鉄則だ。もし、あの「会合」を警察が嗅ぎつけていたら、当然、佐和子には尾行がつく。それをこのこやって来られたら、小沼の「隠れ家」まで見つかってしまう。

ひとまず佐和子を追い返してから、再び電車に乗り、わざと遠回りしたほうがいいかもしれない。あるいは、今夜はどこかに宿を取るか……。咄嗟にそんなことを思い巡らしつつ、小沼は訊ねた。

「何か？」

「いえ、あの……」

佐和子はしばし俯き、逡巡していたが、やがて顔を上げ、口を開いた。

「貴代美さんのことで……ここじゃないんですから、お宅に寄らせていただいても、よろしいでしょうか」

「井上さん」

小沼は、あえて変名で呼びかけた。静かだが厳しい声音に、佐和子は怯えたように小声で「はい」と答えた。

「それは、命令ですか？」

「え……？」

「正式に、わたしの家で会合を開けという命令があったならばご案内しますが、私事ならば、お断りします」

佐和子は、唇をかみ締めて俯き、やがて、恨めしげな眼差しを向けた。小沼は、冷たく言い放った。

「では、これで……」

踵を返して駅へと向かった。

佐和子の「聞きたいこと」は察しがつく。彼女は、貴代美の役に立ちたいと望んでいた。どういう経緯かは知らないが「党」に入ることができた。しかしながら、「黨員」になつたからと言って、個人の希望で所属先や一緒に行動する同志を決められるわけではない。まして、いまだ「黨員」でもない一組合員のことなど、幹部に聞いても教えてくれるわけがない。そこで小沼に、貴代美が今、どこでどういう活動をしているか、聞きにきたのだろう。

やはり、今夜はどこかに宿を取ろうと思いつながら、ふと振り返ると、佐和子がうなだれたまま、とぼとぼと後を追ってくる。

……仕方のないお嬢さんだ。

「貴代美は……」

小沼は足を止め、振り返らぬまま、言った。

「当日、私と行動をとものにします。後は、支部長にでも聞いてください」
そのまま、早足に歩き出した。

当日……。

それが何を意味するのか、知らない佐和子ではない。

メーデーの日、貴代美は、小沼と行動をとものにします。

おそらく、「行動隊員」として。

それが命がけの行動であることは、「党」に入って日の浅い佐和子にも理解できた。

小沼が去った後、佐和子はしばし暗い夜道に佇んでいた。お嬢さん、こんなところで何をしているのかね？ 声をかけられ顔をあげると、警官だった。心臓が口から飛び出しそうだった。

深い皺の刻まれた、穏やかな面だちの警官は、女性の独り歩きは危ない、まだ電車もあるし、家が遠いなら円タクでも拾って帰りなさい。駅前通りなら、拾えるはずだよ、と指差してくれた。

丁寧にお辞儀をして駅前まで歩いて電車に乗り、日暮里へと向かった。幾日ぶりだろう……、かつて貴代美と住んでいたアパートへ帰るのは。

部屋に入り、ベッドに腰をおろす。貴代美と抱擁した思い出がからだの芯に蘇ってくる。あの屈託のない笑顔。おさわちゃん、と呼びかける声の暖かさ。

同時に、あの時から送ってきた爛れた日々が脳裏を駆けめぐった。

……あの鶴沼の小料理屋の二階の座敷で、佐和子は村野栄太郎に、「黨員」となるために推薦してくれるよう頼んだ。村野は、推薦がほしければ自分の家に来てくれ、と迫った。恐ろしくなった佐和子はその鞆丸をひねり上げ、悶絶する村野を置き去りにして逃げたのだ。

その翌日、佐和子は雑誌社を休んだ。翌々日、恐る恐る入社すると、村野から電報が来ていた。校正刷りに朱（訂正）を入れたから、取りに来てほしいという。

胸騒ぎを覚えながら、村野が住んでいる鶴沼の農家を訪ねると、果たして村野は、きちんと髪を刈り、髭を剃り、こざっぱりとした着物で待っていた。

「頼む」

離れの部屋にあがるなり、村野は体を折り曲げ、畳に額をこすりつけた。

「一生のお願いだ。笑わずに聞いてくれ」

率直に言う。ここで暮らしてくれ。いや、誤解しないでほしい。この部屋で同居してくれなどとは言わない。近くに家を借りてくれてもいいし、もし適当な家が見つからなかったら、ここの敷地にもう一軒、離れを建ててもらってもいい。わかっていると思うが、ぼくは「黨員」だ。しかも「党中央」の委員なんだ。活動資金も入ってくるし、本も売れていて印税もかなり入った。しかも実家は地主でね、いまでも結構な額の仕送りをしてくれている。お金はいくらでもあるんだ。いや、そんなことはない。つまりだ、言いたいことはこうだ。ぼくは君を「黨員」に推薦してあげる。しかも、ぼくの右腕として働いてもらうようにしてあげる。僕は今、「党」のアジ・プロ部門の責任者だ。分かるかね？ アジテーションとプロパガンダの略だ。要するに、虐げられた労働者階級をわれわれの味方とするための啓蒙活動だな。さらには、全国の同志たちに「党中央」の方針を呼びかける役目でもある。分かるかね？ 要するに、ぼくが発表する文書が、全国数万人の「黨員」や「プロレタリア階級」を動かしているんだ。そのぼくを補佐するということは、即ち、ぼくとともに「党」を動かす立場になるということなんだよ。実に愉快じゃないか。だから、誤解しないでほしい。君に頼みたいのは、ここに来て、ぼくの研究や執筆の手助けをしてほしいということなんだ。男として君に惚れたとか、君に肉欲を感じたとか、決してそういうわけじゃない。本当だよ。お金は大丈夫だ。さっき言ったように、ぼくは大金持ちなんだから。いま雑誌社で月にいくらくらい貰っているんだ？ うん、うん。わかった、倍の給料を出すよ。しかし、先日は悪かった。ついつい酔っ払って誤解を与えてしまったかもしれない。な

に、怒ってなんかいやしないさ。ははは。謝らなくていいよ。あれはぼくが悪かった。君が怒って逃げ出すのも無理はない。あの後？ なに、平気さ。ちよつと吐いてしまったがね。お店のほうには、料金の倍のお金を渡しておいたから、全然平気だ。まあ、確かに痛かったけどね。しかし君、ちよつと聞きたいのだが、君は、その、つまり、ああいうことをやったのは初めてなのかい？ いや、いいんだ。ただ、なんとするか、あれは実に痛いものだね。本当に痛かった。いや、申し訳ないなんて思わなくていい。ぼくは感謝したいくらいなんだ。何故かって？ その……。笑わないで聞いてほしいんだ。ぼくは、田舎の地主の家に生まれた。自分で言うのもなんだが、勉強が好きだったし、成績も優秀だったと思う。みんな、いずればぼくが帝国大学を出て学士になり、官吏として出世するか、学者となるか、どちらかだろうと噂していた。でも駄目だった。知っているとおり、ぼくは病弱だ。しかも隻脚だ。試験を受けても健康上の理由で不合格になつてしまう。ぼくは呪つた。何もかも呪つた。自分をこんなからだにした病気を呪い、両親を呪い、ぼくを受け入れてくれない社会を呪い、ぼく自身を呪つた。だが、何よりも呪わしかったのは、なんだと思う？ ぼくは人並みからだじゃないと気づいたのは、中学生の時だ。それまでぼくは、たとえ片足であろうとも、それ以外は人並みだと信じていたんだ。でもそうじゃなかった。その頃、ぼくは見たんだ。家の土蔵で、ぼくの兄貴が、小作人の娘と逢い引きをしていた。兄貴の逸物が硬く勃起していた。びつくりした。ぼくの逸物が、あんなに大きくなったことは一度もなかったからだ。つまり、ぼくはイムポテンツなんだ。生まれてこの方、一度も勃起したことがなかった。ぼくは絶望した。試験も不合格、こういうからだじゃ嫁も来ない。女郎を買うことだつてできやしない。わかるかね？ 分からないだろうな。生まれた時から、男女の楽しみを、ぼくは

奪われていたんだ。手淫だつてできやしないんだ。自殺したくなつたができなかった。ぼくはひたすらマルクス主義の勉強に没頭した。そんなぼくに光明を与えてくれたのが、君なんだよ。君がぼくの睾丸を捻り上げた時、あれは地獄だった。痛いなんてもんじゃない。からだのなかで、棘トゲつきの鉄球がごろごろと転がっているようで、苦しくて、吐きそうで、本当に死ぬかと思つたところがだ……。少し痛みが治まってから気づいたんだ。ぼくの逸物は勃起していた。土蔵で見た兄貴のと同じように勃起していた。ぼくは夢中で、そいつをしごいた。そして、生まれて初めて射精したんだ……。その喜びは、とても言葉じゃ表現できやしない。暗い水の中から浮かび上がって、目の上に青空が拡がったような、そんな気分だった。だから、頼む。ここにいてくれ。お願いだ。さっきも言ったとおり、君はぼくの学問の手伝いをしてくれればいい。そして……時々、あのように、睾丸を捻ってくればそれでいい。君を抱きたいわけじゃない。僕の逸物を勃起させてくれさえすれば、後は自分でやるから……。お願いです。ここにいてください。僕こそばにいてください。一生のお願いです。

その二日後。佐和子は新時代社を辞め、鶴沼に引越した。駅前アパートを借り、そこから村野の部屋に通った。佐和子に急所を痛めつけられ、床を駆け回って悶絶する村野の姿は醜悪だった。だがそれ以上に嫌悪したのは……：そういう村野を見て、欲情を覚える自分自身だった。

執筆の手伝いが終わると、佐和子は村野の睾丸を捻り上げる。苦しみ悶える村野を放置して、アパートに戻る。そして、自らの指で自らを慰めるのだ。その頃村野は、あの離れの汚れた布団のなかで、同じ行為をしているのだろうか……。

メーデーにおける「行動」への参加を志願したのは数日前だ。

村野とは、鞆丸を捻る以外、肉体的な接触は一切ない。だが、いずれにせよ、佐和子は「女」を武器に「黨員」となり、しかも、村野の推薦により、東京支部長補佐の重職に就いた。叩きあげの活動家である小沼に軽蔑されるのも無理はない。

メーデーでの「行動」について村野から聞いた時、佐和子は確信した。そこには必ず、貴代美がいるに違いない。貴代美に会いたい。会って、一緒にたたかいたい。「行動」を起こせば結果は二つに一つ。革命が成就するか、警察に捕まるか。捕まってもいい。捕まって殺されてもいい。この爛れた日々を終わらせることができる。ただ、その時は、貴代美と一緒にいたい。

佐和子はベッドに突っ伏した。かつて貴代美と愛し合ったベッドの上で、シーツを握りしめ、声を押し殺してむせび泣いた。

VI

春の陽気のせいばかりではあるまい。

卒業まで三ヶ月となったこの時期、女学生の間で話題の中心となるのは縁談だった。

だれそれさん、今度の週末、お見合いですって。もうお決めになったみたいよ。嘘、うまくいってないって聞いたわよ……。

自分もいずれ、そんなふうには語られるのだろうか。安西小百合は頬杖をつき、窓の外に咲き誇る桜を見やりながらぼんやりと思った。北海道では、桜の開花は四月の下旬である。

「安西さん」

教師に注意され、我に帰って教科書に見入った。クラスメイトの間からくすくす笑いが聞こえてくる。やはり、噂になっているのだろうか……。

兄の健吉が、高校の後輩である増田喬ますだたかしという青年を家に連れてきたのは二月のことだ。北海道小樽市の商業高等学校に通っていた増田は、小百合より三歳上。三月に卒業してH市に帰ってきた。いま、就職先を捜しているという。

「なかなか勉強熱心な、いい奴だぞ」

健吉は、増田のコップにビールを注ぎながら、小百合に聞かせるように言った。

「ラグビーも強くてな。一度こいつのタックルを受けて、吹っ飛ばされたことがある」

背が高く、がっちりした体型の増田は、照れたように頭をかいていた。以後、小百合はたびたび、兄を交えて増田と会うようになった。父も母も、増田には好感を抱いているようだった。

卒業したら……。小百合は漠然と思った。この方と結婚することになるのだろうか。

授業が終わり、小百合はしばらくクラスメイトと談笑してから校門を出た。山の緑が青空に映え、道行く人の面差しも心なしか明るげに見える。

大通りに出て、書店に入り、刊行されたばかりの婦人雑誌をめくっていると、「おや？」と、頭上で声がした。顔を上げると、増田だった。経済雑誌を手にはしている。

「あら」

小百合の顔が自然とほころんだ。頭を下げ、丁寧にお辞儀をする。増田も会釈を返して言った。「本をお探ですか？」

「ええ、ちよっと……でも、もういいんです」
「そうですか」

増田はやや口ごもり、小さな声で言った。
「もしよろしかったら、少し、お話でもしませんか？」

小百合は躊躇^{ためら}った。良家の子女が同じ年頃の男性と一緒に歩いただけで不良扱いされる時代である。まして、今はI高等女学校の制服姿だ。クラスメイトに見つかったりしたら、どんな噂をたてられるか分かったものではない。

「すみません……ちよっと急いでますので」

言ってから少し後悔した。増田は、それは仕方ありませんね、と俯き、それから顔をあげて言った。

「そうだ、お兄さんに伝えてくださいませんか。実は就職が内定したんです」

「まあ、おめでとうございます」

不況が続いていた。先日、家に遊びに来た時、なかなか仕事が見つからなくてね、と愚痴をこぼしていたことを思い出した。

「どちらに決まりましたの」

「川奈産業です」

その名を聞いて、息が詰まった。

川奈産業……。

伊集院満枝の婚約者であり、無残な姿で死んだ川奈昭三の父親が経営する会社ではないか。

「では、ここで失敬します」

また遊びにいけますね、と軽く頭を下げて帳場に向かう増田の大きな背中を見ながら、どこまでも付きまとう伊集院満枝の影に、小百合は暗然たる思いを噛みしめていた。

「川奈産業ねえ……」

自宅に戻り、夕食の席で増田の言葉を伝えると、健吉は小首を傾げて言った。

「あそこは経営不振でなかなか大変なんだが、よく、新人を採用したな」

「そうなの？」

小百合は訊ねた。

「うん。後継ぎの長男が亡くなって以来、不祥事続きなんだよ。人減らしをやるんじゃないかと噂になっていた」

「軍との取引も打ち切られたという話だな」

父親が口を挟んだ。

「なんでも、後釜に座った富田産業も、納めた缶詰に危険な薬物が混ざっていたとかで、ちかちか取引を打ち切られるという話ですよ」

「じゃあ川奈も、軍との取引再開をにらんで、新規採用を始めたのかな」

「そうだといいんですけどね」

父と兄の噂話を聞きながら、小百合の頭のなかは、伊集院満枝のことでいっぱいだった。

正月に、「湖南省農民運動視察報告」のガリ版刷りを読まされて以来、満枝とは会っていない。

それから三ヶ月以上すぎた今となつては、思い出すことも稀になった。

増田喬が自分に好意を抱いていることは知っている。自分が首を縦に振れば縁談は成立し、卒業と同時に祝言を挙げることになるだろう。拒む理由はない。漠然とはあるが、そんなふうに考えていた。

……男は、その醜いものをもって、わたくしたち女のからだを刺し貫く。

……からだを刺し貫かれるだけなら、まだ我慢もするわ。心まで刺し貫かれるのは、まっぴらよ。

増田から「川奈産業」の名前を聞いたと同時に、伊集院満枝がかつて礼拝堂で猪俣佐和子に語った言葉が蘇った。刺し貫く。その語感に、結婚と言うものが現実にはなんであるか、生々しく突きつけられた思いだった。

夕餉を終え、自室に戻った。明日は休日。どのように過ごそうか。何か気晴らしがしたい。図書館に行こうか。一日中、好きな本を読みふけろうか。そう思つて、やめた。

伊集院満枝と出会いそうな気がしたからだ。

翌日。

「やることがないのなら、付き合つてよ」と言われ、安西小百合は母親の信子とともに、市内の百貨店に出かけた。卒業式に着る海老茶袴をこしらえるという。

まだ二月以上も先なのよ、と渋る小百合に、信子は、こういうものは早めにしといたほうがいいのよ、ときかない。娘の身だしなみとなると母親というものは、当の娘以上に張り切るものな

のか、と小百合はおかしかった。

呉服売り場には、早くも卒業式目当ての海老茶袴が並んでいる。母娘連れも多い。目を凝らして値札を見比べる信子に、小百合は「この安いのでもいいじゃない」と言ったが、それ人絹よ、と見向きもしない。人絹でいいわよ。だつてお前、みすばらしいのは嫌じゃないか。

I 高等女学校は富裕な家庭の娘が多い。娘に恥をかかせまいという親心が、かえって疎ましかった。活発で気の強い令嬢たちの間で、家がさして裕福でもなく、おとなしい性格の小百合は、身を縮めるようにして、しかし、仲間はずれにはならないよう、気を配って過ごしてきた。最後に背伸びなんかしなくてもいいのに……。

「あら、安西さんじゃございませんか？」

話しかけてきたのは、二人連れの中年婦人だった。信子の知り合いらしく、たちまちおしゃべりの花が咲いた。

小百合は、所在なげに、広い百貨店にずらりと並んだ色とりどりの着物を見やった。この先、自分は何着の服を着るのだろう。たった一度きり着るだけの海老茶袴。たった一度きり着るだけの花嫁衣裳。家庭に入ったなら、慎ましく地味なものを着て、生まれてくる子どもの着るものに神経を砕いて……。自分もそんなふうになるのだろうか。

「安西さん」

緩んだ空気を刺し貫くような、小さいが凜とした声音に、小百合は我に帰った。同時に、背筋が強張った。

やはり……。

どうしても、この人とは、顔を合わせるようにできてるんだ……。
「お久しぶりね、お元気？」
眼を上げると、そこに伊集院満枝の笑顔があった。

渋い柿色のお召しに黒い羽織、髪を丁寧に結い上げ、漆を塗った草履に、手には縮緬のバッグ。もはや女学生の面影はなく、ひどく大人びた風情であった。

満枝は、おしゃべりに夢中な母親たちを一瞥し、もうすぐ卒業ですものね、と懐かしげに眼を細め、そう言えば、と声をひそめた。

「増田喬さんて方、なかなかの好青年ね」
なぜ、その名前を？

眼を見開いた小百合に、満枝は言った。

「一度、お会いして、すぐに採用を決めました。会社を立て直せる方だと」

会社とは川奈産業のことだろう。だが、川奈産業の新規採用を、なぜ満枝が決める立場にいるのだろうか。

「わたくし、川奈産業の大株主になりましたの」

満枝は、戸惑う小百合に説明した。

「増田さんには、これからばりばり働いていただくわ。ぜひ、彼を支えて差し上げてね」

「あ、あの……」

渴いた喉から、やっと声を絞り出した。

「その……増田さんは、ただ、兄の後輩で……」

あら、お友だち？

おしゃべりを終えた信子が歩み寄ってきて、背の高い満枝の美貌をまぶしげに見上げた。満枝は慇懃にお辞儀をし、小百合さんの同窓の伊集院と申します、と名乗り、ふたこと、みこと、信子と言葉をかわしてから、ごきげんよう、と挨拶して去っていった。

その翌日、学校から帰宅し、ちゃぶ台に頬杖をつけて新聞をめくっていた小百合は、経済面の見出しに眼を止めた。

二十歳の大株主。

令嬢、川奈産業を立て直せるか？

伊集院満枝の記事だった。

「このたび、川奈産業の大株主として若千二十歳のうら若き乙女、伊集院満枝嬢が、同社の取締役として迎えられることになった。伊集院嬢は昨夏、市内の高等女学校を卒業したばかり。同社社長・川奈昭一郎氏の令息昭三氏と婚約していたが、昭三氏の不慮の死によって解消した。その後、川奈産業は経営不振が続き、正一郎社長も過労故か長期療養中という。そこで伊集院嬢は亡父から引き継いだ莫大な遺産の一部を、同社再建のためにと同社発行の株式を大量購入、救済に乗り出したという」

続いて、満枝の談話が載せられていた。

「昭三さんのことは、わたくしとしても大変残念でございました。わたくしでお役に立てることはないかといういろいろ相談して斯様な仕儀となったわけです」

「なにぶん若輩者ゆえ、右も左もわかりません。社長様にも重役の方々にもこれまでどおり経営に当たっていただき、ご指導を仰ぎたく存じます」

当たり障りのない社交辞令であることは、小百合にも飲み込めた。

「罪ぶかい女」

満枝の言葉が蘇った。大勢の男性を去勢して殺害し、猪俣佐和子をそのかして川奈昭三を死に至らしめ、ついに、川奈産業を手に入れた。

その川奈産業に、増田喬は入社した……。

もはや逃れられない。小百合は凍りついたように動かぬまま、新聞に印刷された伊集院満枝の文字を凝視していた。

「これでわたくしも、名士の仲間入りというわけね」

新聞紙を丁寧^{ていねい}に折りたたみ、かたわらに立つ篠原ヨシに手渡し、紅茶のカップを口元に運びながら、満枝は言った。

「よろしいのでしょうか」

静かに言うヨシに、満枝はカップを皿に戻して、見上げた。

「なぜ？」

「あまり派手な、目立つようなことはなさらないほうが賢明ではないかと」

「そうね、経緯が経緯だものね」

満枝はあっさりと認めて言った。

「川奈さまのところにも、新聞記者が訪れたらしいわ」

ヨシは眉を擧^{ひそ}めた。川奈昭一郎は郊外の病院に入院中だった。病気ではない。

「大丈夫よ。今回の株式譲渡の真相を漏らせば、川奈産業はおしまいよ。そこまでお頭^びの悪い方じゃないわ」

満枝は立ち上がり、硬い面差しのヨシの肩を抱いた。

「川奈さまには、もうしばらく、社長の椅子に座っていただくつもりよ」

満枝の胸元に顔をうずめるヨシの頭を撫でながら、満枝は冷たく笑った。

「さぞかし、針の筵^{いじょう}でしょうね。自分を不具にした大株主の下で社長職をなさるといふのも」

川奈昭一郎と堀田弁護士が連れ立って伊集院家の洋館を訪ねたのは、一週間ほど前だった。

部屋に通されるなり、突っ伏して額を床にこすりつけ、援助を請う昭一郎を、満枝はしばらく黙って見つめていたが、やがて口を開いた。

「お助けいたしますわ」

眼を輝かせて顔をあげた昭一郎に、満枝は鞭^{むち}を振り下ろすように言い放った。

「ただし、条件が二つございます」

「条件とは……？」

「あなたが所有する川奈産業の株を、すべて譲渡していただきたいのです」

返事に詰まって堀田弁護士を見る昭一郎に、満枝は追い討ちをかけた。

「ただで、とは申しません。相応の額で買い取らせていただきます。当座は、そのお金でしので

「でございますし」

すっかり痩せさらばえた堀田弁護士は、同意を促す眼差しを昭一郎に送った。

「ご心配なさらずに。経営は引き続き、川奈さまにやっています。わたくしは、川奈産業をお助けしたいのです。乗っ取るなんて微塵も思っておりませんわ」

乗っ取る。その言葉に、昭一郎はますます面差しを募らせ、再度、堀田弁護士を見やった。堀田は俯き、口を噤んでいる。

「それで……もうひとつの条件とは？」

怯えて問う昭一郎の背後に、音もなく立ったのは、篠原ヨシだった。

満枝は言った。

川奈さま、覚えてらして？ あなたが、わたくしの父と、そこにいらっしゃる堀田のおじさまと、三人で弄んだ小作人の娘を。そう、そこにいるヨシですわ。あなたがなさったことは、ヨシだけでなく、わたくしたち女性に対する辱めです。その罪を購っていただけないうちは、わたくしとしても、援助をさせていただくわけにはまいりませんの。

否定なすつても無駄よ。堀田のおじさまは、すでに罪をお認めになり、潔く罰をお受けになりました。いま、堀田のおじさまは、睾丸をひとつしか持つてらっしゃらないの。もうひとつは、このヨシの手で破裂させました。大丈夫よ、堀田のおじさまも、三月ばかり静養されて、このとおり、元気でいらっしゃるわ。ちよっとお痩せになったようだし、昔のような威勢のよさはなくなりましたけれど、従順でおとなしい、いい方になられたわ……。

昭一郎は恐怖に怯え、堀田はあの時の地獄の苦しみが蘇ったか、髪の毛をかきむしっていた。

満枝は静かに歩み寄り、床に正座したまま見上げる昭一郎のネクタイを掴み、「お立ちになって」と命じた。歯の根があわぬほど震えながら立ち上がった昭一郎の股間を膝で蹴り上げた。

昭一郎は悲鳴をあげ、両手で股間を抑えて膝をついた。激痛にうめき、そのまま俯せに倒れた。床に這いつくばって悶絶する老人を見下ろし、満枝はヨシに目配せをした……。

一時間後、真っ赤に染まった絨毯にうつぶせになり、破壊された性器を両手で抑えて痙攣する昭一郎の傍らで、堀田弁護士は膝をつかんで啜り泣いていた。

少し離れて伊集院満枝は、泣きじゃくる篠原ヨシを抱いて、赤子のようにあやしていた。

「ねえ、ヨシ」

満枝は言った。

「五月になったら、満州へ行きたいわ」

「満州へ？」

訝しげに顔をあげたヨシに、満枝は微笑んだ。

「ええ……そこで何かが起こりそうな気がするの」

満州——現在でいう中国東北部に満枝が姿を現すのは一カ月後のことである。その前に、昭和五年五月一日に東京で起こった出来事について語らねばならない。